

在宅医療・介護連携を進めるうえでの心得・気づき

8つの項目	取組	取組拠点	在宅医療・介護連携の取組を進めるうえでの心得	気づき
全般	—	⑮	この事業の本質は、地域の状況に応じた重層的なネットワークづくりである。行政が絡んで良いものもあるし、現場に任せってしまったほうが良いものもある。ネットワークづくりにそれぞれの専門職をどのように取組んでいくかが重要であり、行政はネットワークをつくる黒子として支えた方がよい。	—
		⑮	ネットワークづくりがゆえに懇親会も大事である。懇親会を目的にするのではなく、何か会議をやった後に懇親会を行うというスタンスが良い。	—
		⑮	関係者間で本音が出てくるとお互いの悪口になり始めて、関係が壊れてしまいがちになる。どうやって、本音を理解しながら、建前でネットワークを維持していくかが重要	—
		⑦	地域の関係職種、複数市町村で医師会に働きかけていくことが重要	—
		⑥	医師会に対し電話をかけるなど、躊躇せず行動していくことが大事	—
		古河HCの意見	—	医者は時間がなくても、「はいいいえ」で答える質問なら答えられる。「どうしたら良いですか」という質問だと考えてしまう。時間が取れる人同士が、まず集まってある程度考えをまとめておいて、最後に医者を含めて話すとか、段取りづくりを意識すれば変わるかもしれない。医師に考えてくれと言ってもその余裕はない。
古河HCの意見	—	各郡市医師会事務局は、常勤でないところや、一人しか職員がいないところが多い。郡市医師会ごとに考え方や取組が違う。事務局長会議はあるが、事務局員レベルで推進事業について集まる機会や意見交換ができる機会があればよい。顔つなぎや情報交換ができる場がほしい。		
(ア)	在宅医療・介護連携マップ・ガイド等の作成及びその前提となるアンケートの実施	⑰	マップの作成を通じ、地域の関係者が集まって協議することで多職種連携に繋がる。多職種連携を構築する視点でマップ等の作成する過程が重要	—
(ウ)	北茨城地域自立支援センターの職員を中心とした退院支援促進事業	⑧	—	・退院時調整の際、他の病院や施設の介護支援専門員と連携して施設の順番待ちをするというケースが多く、病院から在宅への流れは少ない。施設入所が決まればそれで良いという感じである。 ・病院では退院時が一番良い状態と思っているが、リハ職から見ると一番不安定な状態に写る。自立支援的な知識がないまま在宅に帰ってしまうと預け等の可能性もある。それを予測して入院中に多職種の連携、生活面の再調整を本来始めるべきだが、そこまで介護支援専門員や包括の相談業務の手が回っていない。
	急変時対応シートの作成	古河HCの意見	・急変時の対応については、マニュアルより簡単なチェックリストのようなものがあればよい。選択肢としては、救急車を呼ぶか否かぐらいが良い。 ・救急車は呼ばれたら否応なくその場で蘇生措置をしなければいけない、それを望まないのであれば、かかりつけ医に連絡をして、往診等をしてもらい、救急車を呼ばないということを知識として知っておいてもらうという啓発が必要	—
(エ)	ICTを活用した情報共有(医療介護専用SNSモデルツール)	⑮	—	つくば市医師会では、事業開始3年目に実施したので、ある程度、地域での顔の見える関係が出来ており、比較的スムーズに進んだ。
	情報共有ツールの作成(主にシート)	⑮	SNSというような情報共有ツールは、導入すれば良いというのではなく、前提として地域での顔の見える関係づくり、多職種連携が進んでいなければほとんど活用されない。	ほかの市町村の様式で検証し、地域の実情に合わせて様式を修正していけばよいのではないかと考える。まだ取組んでいない市町村が莫大な費用を使って取組んでいく必要はないと考える。
		③	シートの内容だけでなく、どの局面でどういった情報が必要かを考えることも重要	・市で情報共有シートは作らず、病院独自のシートを活用し、連携を図っていく。
(カ)	研修会の実施	⑰	・情報共有シートは、「情報を提供し、その情報を共有するためのもの」、「情報を交換できる関係を構築するもの」という2つの局面があることを意識したほうがよい。 ・顔の見える関係が構築されていれば、シートにこだわらなくても情報共有の仕方はたくさんある。	—
		⑨	食えることがどういかなれば在宅に戻れるのに、そこが壁になっている人が多い。従って、ケアを行う介護士の教育、特に食支援に関する教育が重要	—
(キ)	パンフレットの作成	⑮	—	医療・介護従事者向けと市民向けの2つがあると良い。
		⑮	シンポジウム等を新たに取組むのは大変なので、既存でやっているものをリニューアルするなど工夫して取組むことも大事	—
		⑮	演劇や映像で出来るだけ実感を持ってもらえるようにすると良い。	—
		⑮	看取りはテーマとして暗く、なかなか市民は来てくれないので、最初のテーマ設定は、在宅で過ごすということを具体的にイメージできるようなものから入っていったほうが良い。	—
	講演会、シンポジウム、フォーラムの開催	⑮	一般県民への普及啓発に当たっては、クイズ形式も有効である。一般の人が何が分からないかを理解している人がクイズをつくると良い。	—
		⑬	家族を看取った人の話が、市民の感情に最も強く訴えかけ、感動を呼ぶ。講演の人選は、看取っている医師にお願いするか、地域包括支援センターが把握しているので頼むと良い。	—
⑤	講演会等は、市民全体を対象にしたものだけでなく、小さい単位(地区)でも実施していくことが啓発普及に繋がる。	—		
⑨	講演会等は、一回だけでなく継続していくことが大事	食事は毎日のことなので大変である。一般の人は、「きざみ食」など、なかなか分からないため、介護をしている人たちへの調理法の講習などの支援も重要ではないか。		